

小説 明治天皇

長田 幹彦 著

光文社

昭和二十五年九月二十日 印刷
昭和二十五年十月一日 初版発行

小説明治天皇

著者 長田幹彦

発行者 神吉晴夫

印刷者 山元正宜

印刷所 三晃印刷株式会社

東京都文京区柳町二六



定價二百三十圓

發行所

株式會社

光文社

東京都文京区音羽町三ノ一九
電話九段(33)一三一—九番
振替口座東京一一五三四七番

(關川製本)

目次

日露戦役	五
旭日旗のかげに	五四
國民の力	一〇五
平和は雲にのつて	一五四
東亞の曙光	二〇五
底に流れるもの	二五六
大奥の怪	二九二
大陸政策	三三九

小說明治天皇

装
画
田
代
光

日露戰役

一

明治三十八年四月二十六日、かのロシア大帝國最大のホープ、ロジエストウエンスキイ提督に引率された北歐バルチック艦隊の精銳三十九隻は、既に堂々舳艫相ふくんで、佛領安南のカムラン湾を發進、時々刻々、日本領海へむかつてひた押しにその強引な侵攻作戰を敢行しつつあつた。それはさながら、姿なき惡魔のごときものであつた。飛行機も潜水艦も、リーダーもない時代のことであるから、はたして對馬海峡へやつてくるか、それとも北海道と千島の間へ出現するか、あるいは津輕海峡を襲うか、敵の攻撃意圖はさつぱり見當がつかない。わが國においては、それこそ朝野をあげて不安と焦燥にぶちこまれ、ことに沿岸各地は都會も農村も、もうまるで鼎の沸くがごとくに喧々ごうごう、誰れも彼もほとんど恟々として寢食も忘れているような有様であつた。我日本はこの一戦に勝つか、敗けるかによつて、約一年と八カ月にわたる必死の自衛戰が決定し、好むと好まざるとにかかわらず、眞に國家存亡の分岐点にたたされていたのである。六千万の同胞はたとえ土にかじりついても、どうかして勝たねばならぬ最後の段階に突入しつつあつたのである。

それはいわば、今度の太平洋戦争におけるセイバン島失陥とまつたく同じ状況であつて、もしこの一戦に敗北すれば、満洲に轉戦しつある五十万の日本陸軍は全く腹背に敵をうけてやがては壊滅、したがつて、いよいよ本土決戦というよりな悲惨な戦局に轉移していくことは必定である。しかももうその時には、連戦連勝の興奮もさめて、國力は既に底をみせだしていたのであつた。

明治天皇の御憂慮はなみなならぬものがあつた。

東京宮城は大本營になつてゐるので、皇后さま（昭憲皇太后）は、ずつと前から葉山の御用邸へお移りになつてゐた。その葉山ですら、一ど、浦塩艦隊が津軽海峡を突破して、東京湾口へあらわれたので、大変な騒ぎを演じたことがあつた。附近を航行中の汽船は幾隻となく匆惶として相模湾の陸岸近く遁げこんでくる。夜になると、どこかで要塞砲の音がいんいんと聞えてくる。横須賀からは砲兵がやつてきて、海岸の要所々々へ砲列をしく。もう今にも敵兵が上陸してくるような慌ただしいさわぎであつた。

それにこりたか、御用邸の沖には、ときどき駆逐艦が御警衛のために巡航してきた。

皇后さまも戦局の推移にはすいぶん御心を悩ましておいでになつた。ひまさえあると側近の典侍や命婦をおめしになつて、懸命に御座所で綱帯巻きの作業である。

そのころ、お二方の皇女がたも御用邸へおいでになつてゐた。それは昌子内親王（後の竹田宮

恒久王妃とこひさみきと、それから房子内親王ふさちかみ（後の北白川宮成久王妃きたしろがわのみやなるひさちかみ）である。昌子内親王が十七、房子内親王が十五であつた。お二方ふたまたとも、皇后さまの葉山の浜における寂しい明け暮れをおなぐさめするため、三週間の御予定で東京からわざわざお出むきになつたのである。

硝子戸に明るい松影のうつる御座所の南庇みなみびきで、お二方も一しよに繻帯じゆたいまきのお手傳いをしていられたが、まだ御若年のこととて、じきにお倦おきになつてしまふ。琥珀こはくの綾あやのたつたおそろいのお召めしに、同じ袴はかまをはいておいでになつたが、昌子内親王は皇后さまの方をおむきになつて、「あの、おたあさま。今日はお天氣がよろしゆうございますから、御散歩にお出ましになりませんの。」と、可愛らしくお笑いになる。

皇后さまは、朽葉色くちはいろのお洋装で、御座所でも同じ色の、フランス風のボンネットをかぶつておいでになる。玉子形たまごがたの、お内裏だいり様さまのような、実に端麗たんれいなお顔である。何かおつしやると、少し長めの前歯が、小さな唇くちびるからちらりともれる。顎あごの細いのが、あまりにも彫刻的な感じであつた。ちやうど四十二でいらしつたが、お年よりすつとお若くみえた。

皇后さまは、しすかに繻帯じゆたい卷まききの機械きかをおとめになつて、

「昌子様、あきたのでしよ。小百合さゆり、今日けふ巻いた分を、数えてごらん。もう三つまくと、二千になると思うが。……」皇后さまはうっかりしていらつしやるようで、いつもよく数をおぼえていらつしやるのである。権ごんの典侍すけの小百合さゆりが、漆塗うるしぬりの黒いひろぶたのうえの繻帯じゆたいをかぞえてみ

ると、たしかに二千に三つ足りなかつた。

大たい四百巻をひと箱にして赤十字社へ御下賜になる。とくに菊花の御紋章などはついていなかったが、皇后さまはじめ妃殿下がたのお巻きになつた繻帯は、戦地においても、内地の軍病院においても、むろんとりつこであつた。その時分の兵隊は、皇室を神のごとくに尊崇していたから、御下賜の繻帯を傷所にまくと、それだけでも負傷の快癒が早かつた。

皇后さまはおひとりで一日に少くとも二百はおまきになつた。世間では夜でも仕事をおつづけになるので、毎日五百ずつは御下賜になるといつたえていたが、それほどにはお出来にならなかつた。もつともその時分の機械はきわめて不完全なものだつたので、二百おまきになるのも容易なことではなかつた。小百合の典侍はよくお肩に按摩をしてさしあげた。

二

内親王がたがおせがみになるので、皇后さまは午後の二時に御出門で、海岸へ御散歩におでけになつた。お伴は年とつた皇后宮事務官が二人、典侍が二人、それに命婦が三人、あとは御警衛のものが四五人だけであつた。側近の婦人たちは例の桂におかいどりで、おかいどりのうえから垂れた長い髪は、古風に杉原紙で結んでいた。はきものは、それでも地下風に赤い鼻緒のすがつた草履であつた。

事務官たちは途中で内親王方のお砂遊びがあるので、眞新らしい青竹の小ぶりの熊手を捧げていた。下位の命婦は内親王がたのおはきかえのお草履をもつていた。

いつもは御用邸の裏御門からお出ましになつて、小さな溝川の岸を東伏見宮の御別邸の横手へお出になる。波打ちわまではほんの小半丁しかなくて、そこいらはしじゅう氣をつけて清掃してあるので、砂地はともきれいであつた。若いものはみんな戦地へいつてしまつたので、老人たちが涙の仕事をやつていた。

内親王がたは大変なおはしやぎで、長い袂をヒラヒラさせながら、先に立つて走つておいでになる。お二方とも御活潑なので、年とつた事務官たちは、いつも息をきらしてしまふのであつた。

「ねえ、お姉様、こちらへいらせられませ。」など、はじめのうちは宮風のお言葉だが、少したつともう学習院ふうの、わりにくだけたお言葉つきになる。一種くせのある上流言葉であつた。皇后さまは、微笑をうかべていらつしやるだけで、別にそれをお叱りになるようなこともなかつた。一たいにとても穏かなお方だつた。

北川宮の御別邸には、大きな老櫻が三本、ついでないだまで眞白に咲いていたが、南の浜は暖いので、もういつのまにかすつかり散つて、そろそろ上枝から青葉になりかけていた。砂浜にも一面に浜防風がしげりだして、海はエメラルドのように青々と澄んでいた。白く泡だつたさざ

波がどどツ、どどツと、ときどきのどかに打ちよせてきては、砂のうえへ弓のような形にこまかい貝の粉をひき残していく。そのなかには小娘の爪のような美しい櫻貝がたくさんまじつていた。

あくまでも明るい沖の方には、三浦三崎の翠微すいびが夢のように煙つて、漁船が四五艘そう、シーソーゲームでもやつているように、浮いたり沈んだりしている。空には雲ひとつ流れていなかつた。戦争中とは思えないような平和さである。

「おたあさま、もうあすこの松林の中には、松露しょうろうがたちますそうでございますね。まいつてはいけませんですの。」

房子内親王はそうおつしやりながら、むこうの砂山つづきの松林をおさしになる。そこはこんもりした二十年生ぐらいの松林で、井上子爵の別荘であつた。井上子爵というのは、あの明治憲法を制定した、今から六十年も前の文部大臣井上毅氏のことである。

皇后さまも、ふつとお氣持が変つたように、

「お、もうそういえば、ここいらでは松露のたつ頃になりましたね。戦争中は何となくあわただしくて、季節のうつりかわるのもわからないものね。」と、絲櫻いとぎくらの典侍すけの方をふりかえりながらお笑いになる。

御警衛の警手たちは心得て、あわてて御用邸へとつて返し、鋸のこぎりをもつてきて、井上別荘の垣

根を外から二間ばかり切り開いた。内親王がたは眞先にそこから庭内へおはいりになる。

井上別荘は間敷にして、五間ばかりの、きわめてみすばらしい家であつた。離れのようになつた六疊の小間では、十七八の青年が肱掛窓の敷居へ腰をかけて、赤い本をひろげながら、何か大声で朗読していたが、ひよいとこつちをみると、あわてふためいて白木綿の薄汚れのしたカーテンをひいてしまふ。両手で、力一ぱいにひいたので、端の方が氣の毒にも破れてしまつた。あまりにも不意のお成りなので、すつかり面喰つてしまつたのである。

皇后さまもその様子がおかしかつたので、にいつとお笑いになりながら、事務官に、

「この家にいるのは、出征軍人の家族だそうだね。あとで眼どおりへ出るようにつたえておいてください。」と、おつしやる。

庭園はそう廣くはなかつたが、松が密生しているので、ちよつと奥が知れないふりにみえた。粗末な縁先からすつとなぞえに砂地になつていて、海岸へ出るころは眞青な芝生になつていた。縁側にいても、波の音はごうツごうツとひびいてきた。

雑仕が縁端をはたいて、そこへ羽二重の大きなお座布團を二枚重ねてしく。皇后さまはそつとそれへおかけになつた。硝子戸の中は疊の茶ツぼく煤けた八疊で、襖なんかもみるかげもない安普請で、床の間には掛物もかかつていなければ、置物もおいてない。蓋をあけツばなしにした古行李が、ほりあげてあつて、その中から洗濯ものが顔を出していた。

実さい殺風景な佗び住居であつた。

三

内親王がたは、典侍や命婦を相手に早速松露をさがしておあるきになる。そこは葉山でも特に松露のよけいにたつ松林なので、お二方ともとても御機嫌で、きやツきやとはしやいでかけてお廻りになる。お下げになすつたお髪にうすい肉色のリボンをかけていらつしやるのが、浜風にヒラヒラしていた。房子内親王は色の浅黒いちよつときついお顔だつたが、昌子内親王の方はぼちやぼちやと色白で、とてもお可愛いらしい町娘のようなごきりようだつた。

事務官たちは台所の方へ廻つて、ちよろどその頃、井上別荘をかりて、轉地していた木下少佐の奥さんをよびだした。さきほど皇后さまからお言葉があつたように、間をみて御前へであるようにとつたえる。

少佐夫人はもうすつかり恐縮して、小肥りのした白い顔が、眞紅に上氣していた。実は二人の娘さんが体がひよわいので、留守中空氣のいい葉山へ療養にやつてきているわけなので、紋付さえもつてきていない。むろん帯なども粗末な半幅のものしかないのです、このままで御前へであるのは、いかに恐れ多いといつて、しきりに辞退している。折角のお言葉だし、それでは却つて皇后さまに失礼にあたるからといわれて、夫人はもうどうしていいか、へどもどしていた。

そうしているところへ、庭の方で、突如、内親王がたがどろしたのか、きやツと悲鳴をおあげになつた。すわツ一大事というので少佐夫人は台所の板の間へ尻餅しりもちをついてしまつたが、そこへもう一人の年とつた事務官が顔色をかえてとんできて、

「誰れかきてください。誰れかおりませんか。」と、土間をおろおろしてまわる。

離れの方で、さつき本をよんでいた青年はこれも眼を宙につけて、どたばたとびだしてきた。「どうしたんです。何事ですか。」

その青年もブルブルふるえている。

事務官は口をあぐあぐさせて、

「いや、君、いいところへきてくれた。今、御前ごぜんへ蛇がでたんじや。大きな青大將がな。」

青年も眞紅まつかに頬を燃やして、

「えッ、蛇ッ、青大將ですか。」

「そうじや。何はともあれ、早く、はやく追つてくれんですか。女のかたばかりでどうも出来んですから。」

青年はもう眉をつりあげて、そのまま裸足はだしで砂地へとびおりてきた。みていると、物置から刃の長い、大きな百姓しやうび鉞くわをひきすりだしてきて、夢中になつて庭の方へかけだしていく。

庭へでてみると、驚いたことには、ちようど皇后さまの腰をかけていらつしやるすぐ前に、ど

ここからはいだしたのか、長さ一間半以上もあるうかと思われる、大きな青大將が、くねくねと体をくねらせながら音もなくはつて歩いてゐる。ときどき鎌首をもたげては、どす紅い色をした舌をべろりべろりと出す。むろん高貴なお方の御前も平氣で、ともすると、皇后さまのお靴先の方へ方向を轉換しそうにする。

青年は総毛だつたように、襟首のところ（たもと）が鳥肌だつてきた。顔全体が右へぎゆうツと歪（ゆが）んだかと思うと、彼は二度ほど躍りあがつて蛇の方へ走りよつていつた。とみるまに、大鉞を大上段にふりかぶつて、いきなり蛇の鎌首めがけてどやしつけた。あいにくねらいがはずれて、鉞先がはつしと庭石へあたつたので、火花がぱツと散つた。

青年はすつかり度を失つて、今度は蛇のうへへ踏んまたがるようにして、もう一ど鉞をふりおろした。今度は手もとがうまくきまつて、蛇は頭から一尺ばかりのところから二つにちぎれてしまつた。それでも胴体はよれよれになつて、まだによるによるのたうち廻つてゐる。青年はそれを二ども三どもどやしつけて、はツと御前に氣づいたか、あたふた鉞の先へ蛇をひつかけ、それなりするずる松林の奥へひきすつていつてしまつた。青年の額にはおかしいほど汗がふきだしてゐた。

内親王がたや側近の人たちは四五間はなれたところへつつ立つて、せいせい息をきつていられる。よほど恐かつたものとみえ、昌子内親王は熊手も何もおつぼりだして、松の幹へかじりつい